

在宅勤務を推進せよ！

もうかれこれ 20 年ぐらい前の話になるが、小生が広告代理店に勤務していた頃、制作セクションでとんでもない事件が起こった。なんとシングルマザーの女性が、会社に自分の子供を連れて来て、デスクの傍らで遊ばせながら仕事を始めたのである。これには周辺のものはいきり果てたが、彼女に対して誰も物を言えなかった。何か深い事情があると考えたからだ。そこでやむなく担当の上司が彼女を会議室に呼んで、ジックリと話し合っただけ。彼女の話では、この日に限って家庭の事情で、子供の面倒を見てくれる人間がいなくなり、彼女は会社を休むことが出来なかったのだ、やむなく子連れで出勤して来たというのが、主な理由だったらしい。なるほど世の中には、こんなことがあっても然るべきかもしれない。しかし今の時代になってよくよく考えて見ると、彼女の選択は正しかったようにも思える。子供は母親の傍らで育つのがもっとも自然な姿であり、子供にとっても母親にとっても、幸せ感を享受できるからである。

★ ★ ★ ★ ★

子供が保育園に入れなかったために仕事をやめてゆく女性も多い。政府は何とかする、何とかする、といいながら、待機児童の解消は一向に進まない。ネットにもその苦情がアップされて、国会でも論議されている。しかし安倍内閣に、たいした期待はできないし、今後若い働き手が一気に減少することが見えてきた現状において、この問題は日本経済の浮沈に関わっている。しかも保育園が増えないのは、保育士の給料があまりにも低すぎるからというのだ。これでは生活設計が立たず、保育士は当座の腰掛となり、他にもっと給料の良い仕事があれば転職してゆく。この給料に関しては介護士も同様である。何に使われているか分からない某県会議員の『政務調査費』や、国も県も市町村も、議員数を減らしてでも、少しはこうしたハードな仕事でありながら、給与的には恵まれていない方に回して、格差社会の減少に努めたらどうなのだろうかと思ってしまう。

★ ★ ★ ★ ★

同様に認知症の親を抱えて右往左往する中年日本人の姿は、もうすぐそこにやって来ている。今後、団塊の世代は 10 年以内に認知症世代に突入する。この介護のために若い世代が、会社を辞めなければならなくなって来るという現状が、既に始まっているのである。しかもこの世代は一人っ子が多くなって来る世代で、意外にも独身を貫いてきた者も少なくないという。特に男性に多いというのだ。そうだろう。というのは女性と男性が生まれてくる比率は女性 100 に対して男性 108 ぐらいである。動物や昆虫などの世界では、もっともっとオスの数が多く、小生がオオムラサキという蝶を飼育したとき、何とオスの数はメスの倍以上だった。

神様は強いオスだけが子孫を残せるような無慈悲なルールを設けたらしい。しかしこのルールは先進国の現代社会では不都合になっているように見える。一夫一婦制が定着し、この夫婦を基準にして子供を育てることが、制度化されているからだ。

★ ★ ★ ★ ★

しかしお隣中国ではもっと深刻な問題が起きている。この国ではかつては一人っ子政策があり、この結果男性の数が10%以上も多く女性不足となり、独身男性があふれているのである。しかもこの世代が既に高齢化に差し掛かっており、熟練働き手の急減少により、賃金の上昇を招いている。更にはこの世代は一人っ子政策のもと、2番目に生まれて来た子供は戸籍を持たずに、社会のカゲでひっそりと生きてきた。この人たちの数は定かではないものの、数千万人もいるのではと推測され、こうした社会の不安定要素が顕在化して来ている。このため先日ついに『一人っ子政策』は終了したが、中国のこのイビツな現象の解決には、この先まだ20~30年もかかる。これも最近の中国経済の停滞の一つになっているのである。中国ではこの先、内政ではこの人口問題や汚職に麻薬問題。外交では異民族問題や、途方もなく長い国境警備の問題など、人口問題以外にも余りにも大きな課題を抱えている。最近突如として世界経済を脅かした急激な中国経済の縮小の原因は、こんな所にもあるというわけだ。先進諸国の国家は、まず底辺に社会の安定があつて、その上に経済の安定と発展があり、更にその上に政治と治安が存在することによって、うまく国家が機能しているというのが一般的である。しかし今の中国では、底辺が既に崩れ始め、『我田引水』以外の哲学はない。孔子や孟子の教えは一体どこへ消えたのだろうか。有り難いことに日本では700年に及ぶ武家中心の政権が続いたために、『武士道』という哲学が広く深く浸透して、儒教の教えも仏教の教えも、今でも社会の中でひっそりと生きている。そればかりか中国では経済が崩れ始めて、汚職まみれの政治に汚染され、理想も夢も消えうせて、ただ他国のものを真似して安値で販売するだけの商売に墮落してしまっている。こうした社会全体の現実が急激な成長鈍化の原因にもなり、この余波が世界中に到達しようとしている。

★ ★ ★ ★ ★

話は横道にそれたが、人間の場合、特にわが国では適齢期になると男女比はほぼ100対100になっている時代が長かった。成人するまでに、事故や病気などによって、男の子は成人に達しないケースも多く、またかつては戦争などで、男性の人口は著しく減少せざるを得なかったこともあり、男性の適齢期の人口が90前後にまで下がったこともあった。しかし科学的には、受精の確率は100対100の筈である。ではなぜ出生時において100対108になってしまうのだろうか。どうやら、女性は受精されて胎内で発育してゆく過程で、完璧な新生児になれないような状態だと、自然と流産されてしまうケースが多いらしい。また最近の学説ではY染色体を持った精子の方が、X染色体を持った精子よりも若干軽いため、

運動量が少しばかりまさり、受精する機会が多くなって、男の子が多くなるという説もある。ところが自然界の動物の世界では、オスの場合は生まれて来たら強いオスに駆逐されて一夫多妻となることが多く、弱いオスは自然と淘汰されて強い遺伝子が次世代に受け継がれるように仕組まれている。神様はそんな無慈悲なルールをあらゆる動物に課したらしい。ところが人間の場合は最近、医学の進歩により、たとえ生まれながらにして何かの健康的な障害が発見されても、これを治療して健康な身体に直すことが出来るようになって来た。戦争などもなくなり、男性が適齢期を迎えるまでに死に到る確率は、かなり下がってきたというわけである。しかしその一方では草食男子も増えているとのことである。このため男性の方が伴侶を見つける確立が減っていることも確かなのだろう。こうした男性の弱体化により、人口問題が様々な課題を社会に投げかけているようにも見える。

★ ★ ★ ★ ★

こんなわけで働き盛りの男性が、結婚する意志はありながらも良き伴侶に出会えなかったケースも数パーセントは発生しており、こんな不運な男性は妻に両親の介護を預けるわけにも行かず、退社して両親の介護に当らなければならないという、もう一つの事情もある。かりに妻があったとしても、妻の方にも両親があるわけで、そうそう介護ばかりに携わるわけには行かない。しかも最近では男女とも晩婚化の傾向もあり、ヘタをすると子供の養育と親の介護がダブって来ることもありうる。

そこで子供の保育園の問題も親の介護の問題もそして現在バブル期以上になっているという都心の住宅価格も、一気に解消できる方策がない限り、この問題の解決は出来ない。しかし実はある。それは他でもない在宅勤務の早期推進である。

★ ★ ★ ★ ★

現在日本の休日は土日と正月休み、祝日を併せると 120 日ほどあって、これは一年の 3 分の 1 に当る。これに有給休暇を加えると、実は週休 3 日制が既に成り立っている。あと 2 日在宅勤務が認められれば、出社日は平均週 2 日だけという事になる。週に 2 日だけ通勤するという事なら、都心から 100 キロ圏の広い 1 戸建てに住んで、休日には庭いじりや近所の散策をしたいという人も増えて来ようし、郊外には郊外の自然のよさもある。ふるさとから両親を呼び寄せることも可能になるかもしれない。また完全な在宅勤務になったとしても、月に数回は打ち合わせや問題発生時には、その解決のために本社に出社する必要も出て来るだろう。こんなときには子供を一時的に預ける保育施設は欲しい。子供もその方が、集団生活を学べる機会が増える。要は保育園や託児所を柔軟にして、地域社会のすべての子供たちを、柔軟に受け入れられるようにすべきなのである。

またこのことは老人の介護においても同様である。健康な人間でも、介護の毎日では気が滅入る。たまには親をヘルパーなり施設に預けて、のんびりしたいこともあるだろう。介護施設にもこうした柔軟性が求められているというわけである。

★ ★ ★ ★ ★

一般的な大企業では経理や、設計や、ソフト開発など個人のデスクワークにたよる部分の多い職種等では、在宅勤務も大いに可能である。ただ中小の企業ではそうは行かない。1人で何役もやらなければならない企業も多いはずである。しかし大企業での在宅勤務が増えて来れば、通勤ラッシュは以前より楽になって来るだろうし、フレックス出社への可能性も広がって来るだろう。何よりも大事なことは、都市への住宅の集中によって地価が上がり、庶民は一生家をもてないような不幸を早急に解消することであるが、住宅価格はやがて人口が激減してゆく過程で、極端に低減化されて行くことは確かだろう。そしてもう一つ大事なことは平日には通勤ラッシュがあつて、土日は高速渋滞があるという、こうした様々な集中問題を分散化して、平準化することにより、都心も郊外も均等に経済活動がなされ、均等に余暇を享受するというシステムの構築が可能になってくることであろう。

★ ★ ★ ★ ★

自宅で子供を傍らで遊ばせながらパソコンを叩いていても、勿論新たな問題が発生するだろう。例えば子供が親離れできなくなったり、逆に親が子離れできなくなるというようなことも起こってくるだろう。しかしこうした問題はどんな社会でも多かれ少なかれ起こる問題であり、大半が子供の成長過程で解消されてゆく筈である。むしろ自然の中で、昆虫や動物と戯れたり、猫を飼ったり犬を飼ったりしながら、優しい心の人間に成長して行けるような気がする。しかも両親は往復の通勤時間はなくなるし、パソコンの実力如何によっては通常の勤務時代よりも、はかどることだって夢ではない。もともと在宅勤務は個人の裁量にゆだねられる部分が多いわけであるから、パソコンの得意な人は効率も高くなり、個人にとっても雇用者にとっても、メリットが増えることも期待される。企業側にしても、オフィスのスペースを縮小できるから、そこに託児所を設ければ、通勤派にとっても大きなメリットが生ずることだろう。こうすれば女性の人材を集めやすくなるだろうし、いわゆる3食昼寝付きの時代とは異なった夢も広がってくることだろう。

★ ★ ★ ★ ★

これは親の介護に関しても同様である。24時間親の手を握っていなければならないというわけでもなかろう。1時間に10分だけ親の世話をして一日に10時間労働すれば、通常勤務と同程度の効率になるだろう。勿論通勤派と在宅派との間には賃金のある程度の差は生ずるであろうが、それは相互の話し合いということになり、パソコン処理の早い人間はむしろ効率よく作業が終了するかもしれない。無論どこの企業でも管理職や、営業職はこの限りではなかろうが、出世だけが人生でもなければ、社会にはどこでも日の当たるところと日陰はある。そこをどう按配つけて、自分の人生感を達成して行くかという哲学の問題に替わって来る。

日本の政治家は等しくコンピュータが不得手なため、こうした発想をするものは

極めて少ない。すぐに大きなハコ物にこだわる。役人も同様である。しかし在宅で仕事が出来れば、むしろハコ物は減少傾向に転化するだろう。子供を傍らで遊ばせながら、仕事をする事は親子の本来あるべき姿であって、むしろ母親が自分の子供を育てることにより、子供は親から学ぶものが大きくなって来るはずで、これは親にとっても自分自身を見直して、子供のよき遊び相手になるべき努力のきっかけともなるだろう。また親の知識を何かにつけて子供に伝授してゆくことも出来るだろう。この社会は子供から学ぶことも多いはずだ。自然界では子供を他人に預ける動物は極めて稀である。恐らく神様はそのように設計したはずで、これに逆らう方が不自然で、現在の保育園制度は、巨大になりすぎたこの資本主義経済が作り出した歪んだ制度であると思っており、将来大きな禍根を残すことになりかねないかと、むしろその方を危惧している。因みに小生は幼稚園も託児所もない時代に育った。

★ ★ ★ ★ ★

動物の中には必ず例外があるものだが、たとえばカッコウやホトトギスなどホトトギス科の鳥は、他の鳥の巣に自分の卵を産みつけて、他の鳥に自分の子供を育てさせることで知られている。これを『托卵』といい、育てる親鳥を『仮親』と呼んでいる。ちなみにカッコウなどの場合は、ノビタキの巣に卵を生みつけることが多く、この際仮親の卵を一つ持ち去り、数合わせをするという。小生には保育園制度は、どうもカッコウの一亜流のように見えて仕方ないのである。これは動物の中でも異質な例であって、通常は実の親に代わって子供を育てる例は、親にはぐれたり、親を失ったりしたときなど特別な場合に限って、他の親が替りに育てることもあるようだ。しかしどちらにしても自分の子供はその親が育てるというのが基本である。というのが小生の感覚であり、保育園や託児所は、むしろ特殊例と考えている。最近では親子間での殺人や、トラブルは幼少期の親子関係が尾を引いているのではないかと、小生の歪んだ『猜疑心』は、こうした事件の背景をつい、疑ってしまうのである。従ってそんなドメスティックな犯罪の背景に関して、どんな親子関係の経緯があったのか、統計的なデータを出してほしいものと願っている次第である。

★ ★ ★ ★ ★

在宅勤務は企業にとっても大きなオフィスや多大な会議室を持つ必要も減ずるから、経済的な効率もずっと高まる。もしオフィスに大きな余裕スペースが出来れば、前述のように、そこに企業内保育園を作ってはどうか。母親にとってもすぐそばに子供がいるとなれば、安心して仕事に集中できる。在宅勤務派があり、社内保育園派があって、日本経済は多様な展開が出来るようになるのではないだろうか。これを阻むそもそもの課題は、マイクロソフトのパソコンソフトがどんどん使いにくくなって、昔のようにパソコン・オペレーターがいないと、スムーズに作業が進まない所にあるような気がする。マイクロソフトは早晩、韓国か台湾、はたまた中国に売却されて、今後は Apple や Google あたりが素晴らしく小型で速度が速く

使いやすいパソコンを発売して、在宅勤務はもっと一般化されて来るような気がしてならない。肝心なことは政府がその気になってコンピュータ教育をもっと普及させることと、在宅勤務を採用する企業に対して**税的な緩和措置や、社内保育園を開設する事業所には、援助を施して、この取り組みを数歩前進させることではなかろうか。**在宅勤務はまだまだ先と思われている方も多かろうが、通勤時間がゼロになり、マイペースで仕事出来るようになり、オフィススペースを大幅に減らすことが出来れば、少しぐらい給与が下がった所で、勤労者にとって得られるメリットは大きいし、雇用者にとっても大きなプラスになるはずである。

★ ★ ★ ★ ★

さて親を介護しながら、自宅で仕事をするというのは、親子間でトラブルも発生するだろうが、介護組織やヘルパーの助けを借りながら、実行して行けば、恐らく結局は相互に満たされた終末を送ることができるのではないかと思われてならない。

以下は小生の場合であるが、長いこと母を1人暮らしにさせてしまった。そこで母が80歳になったとき覚悟を決めて仕事の方を制限し、東京のマンションを引き払って、母と同居した。もうかなり老いた母は、小生の帰還に大層喜んでくれた。幸い母は認知症を患うこともなく90歳まで元気に生きてくれた。小生も後悔はなかったし、母も死ぬ間際までしっかりとしており、天寿を全うすることが出来た。

むしろ悲しむべきことは母が亡くなる10日前に58歳だった長姉を悪性リンパ腫で亡くしたことだった。同じ時期に長姉は恵比寿の病院に、母は築地の病院に入院していた。小生にはもう1人姉がいたから、母は小生が見舞い、長姉は次姉と姪が面倒を見ていた。幸せだったのは姪が勤務していた会社が、姪の人生観と合致せず、会社を辞める覚悟をしていたときの出来事で、姪が会社を退職した結果、労働力に余力が生じて、二人の病人を何とか看護することが出来たことである。もし小生も二人兄弟だったら、どうなっていたらと思う。実はこの前の年に小生は義理の兄も亡くしていた。正直1年余りのあいだに3回の葬儀を出すのは経済的にも、また精神的にも楽ではなかった。特に長姉の没後に母を送るときには心が痛んだ。母は長姉がなぜ自分の臨終に来ないかと尋ねた。小生は院内感染や、いろいろな問題があるから姉には母さんの病気のことは伝えていないと嘘を言ってこの場を繕った。母は素直に納得してくれて、それから6時間後の真夜中の3時ごろ静に息を引き取った。

我が家では戦後の貧困の最中、兄弟3人と両親と計5人で、貧しい時代を過ぎて来た。しかし当時、食べ物子供たち3人で分け合って生きて来たことが、今となっては有り難かった。一人っ子は不幸だ。二人でも幸せとは言い切れない。3人いてよかったと思う。3人寄れば文殊の知恵であり、ひとたび何かあったときでも、力を合わせて生きて行ける。そして兄弟姉妹の多いことはそれだけで幸せなことであるとは考えている。着る物も食べる物も、燃料もなかった時代、母の着物を食料に代えて、子供たち3人を育ててくれた両親に、感謝してやまない。